

---

# 魔法少女リリカルなのは～悪を目指す者～

ユニコーンデストロイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜悪を目指す者〜

### 【Nコード】

N4488Y

### 【作者名】

ユニコーンデストロイ

### 【あらすじ】

ある男が悪をなすために魔法少女リリカルなのはの世界に転生した。さあ！その悪しき力を持って全てを破壊せよ！

この作品は悪役がメインの作品です。なのでそうゆうのが苦手な方は戻るボタン押してください

## 第1話 悪の誕生（前書き）

今度は悪役がメイン主人公です。頑張って投稿するお！

## 第1話 悪の誕生

俺の名は小林将大。<sup>いばやしまさひろ</sup>普通に高等学校に通うただの学生だ。俺は今、喧嘩をしている。校内で実力No.1を決めるとか言う下らない抗争に巻き込まれた。

「テメエラ……ふざけんなよ？俺の貴重な時間を何でテメエラみてえなカスに削がれなきゃならねえんだよ……ぶっ殺すぞ！」

丁度俺が昼飯を食って寝ようとした時に一年のガキ共が俺を名指しで喧嘩を吹っ掛けて来やがった。

「テメエ……俺の睡眠時間を潰した罪は重いぞ……覚悟しやがれ！」

そして俺はその一年達に殴りかかった。

十分位が過ぎた頃には相手の数は3分の1になっていた。俺は残りの奴等を潰すべく、駆け足で突っ込んだ。

だが……ここで予想外の出来事が起こった。

倒れ伏していた一人が立ち上がり、俺に体当たりをした。

俺は駆けていた為に避けたり止まったりすることが出来ずにそいつの体当たりをもろに受けてしまい、俺は……窓から転落した。

俺の学校では学年が上がるとどんどん上の階に行くんだが俺のクラスは運が悪いことに四階にあった。俺は頭からまっ逆さまに落下して行き、地面に激突した。

その瞬間、俺の意識は途絶えてしまった。

ん？何で意識が在るんだ？俺は確か一年坊にタックルされて窓から付き落とされたのに？まさか奇跡的に助かったのか？

『残念ながら違う。君はすでに死んでいる』

突然声が響いてきた。俺は怒鳴り散らしながら声の元凶を探した。

「おい！今の声誰だ！隠れてねえで出てこいや！」

すると先程声を出していたであろう黒いシャツに黒いズボンを履いた男が居た。しかもソイツの背中にはデカイ鎌を背負っていた。あの鎌………ゆうに3m50？位あんだろ………あんなもん背中に背負っていやがるなんて………

俺は得体の知れない相手にドスの効いた声で話す。

「お前は……何者だ。それとここは何処だ！」

俺の一番気になる問いを黒ずくめの男に聞いた。

『一応名乗っておこう。私の名はハデス。この冥界の地を統べる王だ。そしてここは冥界だ。』

冥界……………ハデス……………そうゆうことかい。

「やはり、不良は地獄送りってか。さつとしろ。俺に罰を与えに来たんだろ？」

『残念ながら違うさ。私が君をここに連れてきたのは私を楽しませて欲しいからだ。』

はあ？何言つてんだ？楽しませるだと？

「それはつまり、俺をここに呼んだのはお前を楽しませるために貴様のマリオネット（操り人形）になれってか？」

『まあ言い方はあれだが大体そんなとき。』

冥界の王ハデスは不敵に笑いながらそう言った。

「じゃあ何すればいいんだよ。さつと言いやがれ」

『ふむ。君のような感じの奴は大概喰って掛かるが君はそんな事をしないんだね』

「俺は好きであんな喧嘩ばっかやってたわけじゃねえよ。売られたから買ってただけだ。それより早く用件言えよ」

俺は冥界の王ハデスに内容を喋るように急かした。

『分かった。内容は……………最近あちこちの神が自身で見出した人間を漫画やアニメの世界に転生させているんだが……………何処の

奴も皆、バットエンドが嫌だから本来救われない者を救ったり、ハーレムを作ったりと善をしたりしかないんだよ。だが私はあることを思い付いた。それなら私自身が悪を遂行出来そうな奴を送れば良いじゃないかと思い付き、君にその悪役をやらせようと思い、君をここに連れてきたと言うわけさ」

ほう…………アニメの世界での悪役か…………

「面白そうじゃねえか。やってやるよ。行く世界は何処だ？」

『君に言ってもらう世界は一番転生者が行きたがる 魔法少女リリカルなのは と言う世界さ』

魔法少女リリカルなのは…………確か前にアニメ好きのダチに無理矢理貸されて見たことあんな…………面白くなかったがな。話し合いで友達とか…………下らねえなと思ったな。

『さて次に君の能力とスペックだが、君には身体能力MAXと魔力SSS+、能力には仮面ライダーと言う特撮に出てくるアナザーアギトと王蛇とうライダーになれる力、そしてデバイスを渡そう。ああそうそう、もうひとつはこの武器や力を完璧に扱えるように君の頭に情報として入れよう』

何かスゴそうだな

「そのデバイスは起動すると何になるんだ？」

『このデバイスは起動させると狗爪のような武器になる。名前は向こうで付けてあげてくれ。それではそろそろ向こうに送ろう』

「分かったよ。何処から行けばいいんだ？」

俺はハデスに何処に行けば良いか聞くとハデスは無言で俺の背後に指を指した。

そこには嚴重に鎖で縛られ、あちこちに人の足や腕、頭が生えていて真ん中の中央の上には大量の髑髏が幾重にも積まれていた。

俺がその扉を観察していると不意にその扉の鎖がほどけ、人のうめき声みたいな音を立てながら扉が開いた

『さあ、行け。その世界に黒き悪の種を……悲しみを、絶望を振り撒けてこい』

「ああ！ やってやろうじゃねえか！ こんな楽しいこと、放っておけるほど出来ちゃいねえからな！」

俺はいまだにうめき声の上がっている扉に向かって歩き出した。

『一応言っておくが向こうに行ったら今の名前は使えんからな。新しい名前を名乗っておけ』

俺はハデスの言葉に耳を傾けるが返事をせずに頷くだけにして扉に入った。

俺が入った瞬間、扉は勢い良く閉まり、鎖がジャララと物凄い速さで巻き付き、あっという間に扉を開かないようにした。

『さあ……私のマリオネットは何処まで悪をなすのだろうか………  
…楽しみだ』



## 第2話 悪の使者（前書き）

今回、将大のリリカルなのはの世界での名前が明らかになります

## 第2話 悪の使者

俺はいまだにあの扉の中の道を歩いている。

「てか何時着くんだよ。そろそろ休みてえんだがな……………」

まあこんな空間に一人で歩いていれば楽しくないからこうなるのは当たり前か…………誰か話し相手が欲しいな

《我が主よ。何時まで黙っているつもりだ？そろそろ我に真名を与えてはくれぬか？》

すると俺のデバイス…………待機状態は髑髏のマークの入ったガントレットが話し掛けてきた。

「そおいやお前がいたな。良いぞ。お前に名を与えてやるよ。そおだな…………よし、お前の名は呼称、ヘル…………正式名はヘル・カラミティだ。」

《認証登録を開始。呼称、ヘル。真名、ヘル・カラミティ…………登録を完了。これからよろしく頼む。お館殿》

良いねえ…………この古風なしゃべり方は。声も渋いおじさんの声だな。

「そおいやヘル。この道はあとどれ位で着くんだ？」

《あと一刻程で到着する。》

ヘルと他愛のない会話をしていると光が見えてきた。

「あれが出口か？」

《そうだ。お館殿よ》

俺の問いにヘルは軽く返す。

さあ……………あのリリカルなのは世界に絶望と悲しみをもたらしてやろう！

俺は嬉々とした足取りでその光を抜けた。

光を抜けるとそこは深夜の公園だった。俺はその公園の名前を確認しに行った。

「鳴滝臨海公園……………」

無事にこのリリカルなのはの世界にこれたようだな。

さて……………これからまずどうしようかね。拠点も探さないとな。

「さてヘルよ。まずはどうしようかね……………」

《ハデス殿がお館殿を原作の始まる三十分前に送ってある。然らば後はお館殿の判断にお任せ致す》

そうかそうか……

「ならヘルよ。今から原作の開始する動物病院に案内できっか？」

《了解つかまった。まずはセットアップの方をして下され》

「おう。セットアップ」

俺は服のイメージを固めながら言った。確か初期起動時に自分の考えた服をバリアジャケットに出来たはずだからな。

そうしてデバイスから黒い光が発現し俺の体を黒い光と黒い稲妻が覆う。

光がおさまるとそこには黒い服に黒いズボン、黒いロングコートを纏い、顔にはピエロのような仮面がついている。そして手には凶悪な鋭い刃を光らせている小豆色の狗爪が装着された。

「もしも介入出来そうなら介入してジュエルシードを頂いていこう」

《あいわかった》

俺はその場から飛び立ち、ヘルナビにより鳴滝動物病院に向かった。

鳴滝動物病院に着くと幼い少女と少年、それとフェレットみたいな

のがいた。

「ほう………この世界には他に転生者がいるのか？」

俺はヘルに聞いてみた。

《その通りだお館殿よ。このリリカルなのはの世界は希望者が一番多い為に一つの世界に複数の転生者が送られておる》

くくくく………更に楽しくなってきたな。

「さて………一時傍観していようかね」

俺はなのはとおぼしき少女と少年の事を一時、観察することにした

俺の名は前橋翔まえはしりょう………転生者だ。俺はテンプレ通りの転生トラックに引かれてしまい、神に暇潰しのために転生しろと言われて転生した。最初は俺も転生イベントキターー（・・）と喜んだがいざ転生すると赤ちゃんから始まってしまい、とても辛い幼少期を過ごした。止めて聞かないで！あれは黒歴史どころじゃない！と軽く脱線したがとにかくテンプレ通りに進んでいった。家は翠屋のお隣さんで親は普通の一般人。デバイスは学校から帰ると俺の机の上に手紙と一緒に置いてあった。神からの手紙で内容はこのデバイスを持った瞬間に君が願った魔力と身体能力が解放されると書いてあった。

ちなみに俺が願ったのは多目の魔力と強い体だ。デバイスを渡されたのが今起こっているなのは魔法に会うイベントが始まる1週間前だったんだけどね。

それはそうとこの邪悪な思念体は実際に見ると気持ち悪いな。後ろから出てる触手みたいなのはずっとうねってるし、体はゆらゆら揺れてるし……………

「唱えて……………魔法の力を……………大いなる力を！」

今喋っていたのは言わずもながらユーノ。

「魔法の……………力……………」

そして今喋ったのが愛しの少女、高町なのは。

「僕の言葉に続けて！我、使命を受けし者なり……………」

「わ……………我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「け、契約のもと……………その力を解き放て」

「風は空に、星は天に……………」

「風は空に、星は天に」

「……………そして不屈の心はこの胸に……………」

「……………この手に魔法を……………」

「レイジングハート！セエーツト、アーーップ！」

なのはの体から光が発光する。そしてその光が収まると白い羽が舞い散る中に現れた白き天使のような少女が現れる。手には丸いいかにもなステッキが握られていた。

「凄い……何て魔力の量何だ………」

フレット……もとい、ユーノなのはの内にある魔力の量に驚いていた。

「……て……ふえええええ？！何か服が変わっちゃったよ？！え？！えええええ！！」

いやいや、なのはさん……驚きすぎですよ……

「なのは……少し落ち着こうぜ？な？」

俺はなのはの肩に手を置いて動きを制限させ、落ち着かせた。

「大丈夫か？」

「う……うん。もう大丈夫だと思う……」

うむ。なのはも落ち着いたようだし、早速目の前の敵を仕留めるか。

「なのはは封印の準備を頼む。俺は奴を引き付けながら弱らせるから」

「わっ……分かったの！フレットさん！封印でどうすれば良いの！」

なのはがユーノに封印の仕方を教わっている間に俺はあのうねうねした思念体に攻撃をする。

俺のデバイスは剣にリボルバーのついた俗にいう、パイルバンカーの形をしている。俺は思念体に近づき、刃の部分で奴の触手部分を切り裂く。切り裂いたことにより、思念体が狼狽えた。俺はその隙を見逃さず、奴の体に先端に付いている杭を打ち付ける。

「オツシャアア！行くぜ！」

《デストロイ・ブリンガー》

俺のデバイスから女性の声が聞こえてくる。

「総てを貫け！デストロイ・ブリンガーアアアアアア！！」

俺のデバイス：ファルシオンから凄まじい爆音を放ちながら思念体の体を粉碎する。

「今だなのは！封印だ！」

俺は声を張り上げ、なのはに合図を出した。

「リリカルマジカル、封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシールド！」

「ジュエルシールド！封印！」

《シーリング・モード、セットアップ》



「リリカルマジカル、ジュエルシード…シリアル???！封印！」

ジュエルシードが封印され、空中を漂っている。  
俺はなのはの元に寄った。

「お疲れ様、なのは」

「っ……疲れたの〜」

なのはがそう言いながら地面にへたりこんだ。

「すみません。ジュエルシードにレイジングハートを向けてください」

ユーノがなのはにジュエルシードにレイジングハートを向けるように指示を出す。

「うん……分かったの」

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けようとした時、俺達の間を一陣の強めの風が通り抜けた。砂ぼこりが舞ったため、俺達皆は目を瞑った。そして風が去り、目を開けるとさっきまで目の前にあったジュエルシードが消えていた。

「あれ？ジュエルシードは何処行っただの？」

なのはが辺りを探し出す。俺とユーノも一緒に探そうとした瞬間、何処からか笑い声が聞こえてきた。

まさかこんなに簡単に奪えるとはな……はじめにしてはいい感じだね。

「クククククツ……ジュエルシード、シリアル???は頂いていくよ」

なのはとおぼしき少女は状況がうまく理解できないのかおろおろし、横にいる少年は俺に向かって睨みを聞かしている。すると先に声を上げたのはフレットだった。

「それを返してください！それはとても危険な物なんです！」

俺は原作組がジュエルシードを封印するまでの間に描いたシナリオを言った。

「残念ながら返せないぜ。せつかくこのジュエルシードが積んであった船を攻撃したのに、攻撃の余波でジュエルシードがこの世界に落下……ようやく1つを見付けたのだ。返すはずはない」

俺がそう言つと少年が怒声上げながら聞いてきた。

「貴様！そのジュエルシードをどうするつもりだ！」

クククツ予想通りの言葉が来たな。

「単純明快にして分かりやすいぜ？ ジュエルシードを使って全世界に悲しみと絶望を振り撒くのさ！」

俺がそう言った瞬間、少年が自身のデバイスであろうパイルバンカーを俺に向けて斬りつけてくる。

だが俺は少年の斬撃を狗爪で受け止める。少年が驚いた表情を見せる。

「残念だったな。確かに力はあるが技術が全く無いな。力押しで勝てる相手だと思わん事だな！ 少年！」

俺は少年の武器を弾き、空いたボディに蹴りを叩き付けた。少年は痛みに悶えながら地面に体を打ち付けた。

「翔君！！」

なのはが翔の元に駆け付ける。痛みに悶えている翔を介抱しているとなのはが将大の方を見ながら話始めた。

「あなたは何者何ですか！ どうしてこんな酷いことするんですか！」

「俺の名はネロ、ネロ・カオス。世界に混沌と破壊、悲しみに絶望を振り撒く者。そしてもうひとつの答えだがそいつがいきなり斬りかかって来たから対処したまでさ。まあ今日はほんの挨拶代わりさ。もしかしたらちよくちよく君達からジュエルシードを奪いに来るかもな。その時はよろしく。」

俺はそう言うとその場を離れた。少年と少女とフェレットは俺に怒りの視線を向けてくるが初戦闘に疲労に怪我があるため、少年等はその場から動かず、ただただ俺のいた場所を睨み付けるだけだった。

てかこの感覚良いねえ。蝶最高だぜえ！

## 第2話 悪の使者（後書き）

ちよくちよく頑張るお！

皆様の感想が私、ユニコーンデストロイの餌であり、原動力です。

### 第3話 死を撒き散らす稲妻（前書き）

どうも。ユニコーンデストロイです。最新話をどうぞ。

### 第3話 死を撒き散らす稲妻

俺はあのジュエルシード強奪後、しばらく金を作る為に中国の方に行き、レアメタルを採取した。そのレアメタルを日本の企業等に売り捌いた。そのお陰で俺の財布の中は潤沢している。その時に鳴滝市に土地を買い、一軒家を建てそこに住み始めた。そして今は今後の事を考える為にヘルと共に計画を練っていた。

「さて……ヘルよ。俺達は高町なのはからジュエルシードを一つ奪い取った。今の所は使い道は無いがフェイト・テストロッサが介入し始めたら俺はプレシア・テストロッサに会ってみようと思う」

《それは良いが会ってどうするのだ？》

「とりあえず先ずはプレシア・テストロッサに会い、協力体勢を取る。その後はプレシア・テストロッサからジュエルシードを奪う。それにジュエルシードの使い道も思い付いたしな」

《ほう……してお館殿よ。そのジュエルシードの使い道とはいかほどのものか？》

クククツ……ジュエルシードはロスト・ログアだ。あの男が使わないわけがない。

「ある男に渡し、俺との協力を取り付けんだよ」

《ある男？》

「そう……その男の名は………ジェイル・スカリエツティだ」

よう皆！オリ主の前橋翔だ！今俺はなのはとなのはの兄の恭也さんと共にすずかの猫屋敷に招待され、恭也さんはすずかの姉の忍さんと共に、俺となのははすずかとアリサと一緒に外で紅茶を飲みながら世間話をしていた。ちなみにユーノもいるがさっきまですずかの猫に追っかけ回されて疲れてしまい、なのはの膝の上で休んでいる。一時間位してからユーノが念話を使って来た。

「なのは、翔！ジュエルシードだ！」

「すずかの家の敷地内だな、こりゃ…」

「ど、どうしよう。どうやってこの場から出れば良いのかな……」

なのはがこの場から抜けるための言い訳を考えているとユーノが案を出した。

「それじゃあ僕があの木々の所に走り出すから後は上手く言い訳して来て！」

そうユーノが念話をして止めた瞬間に軽く林になっているすずかの家の庭に向けて走り出した。

「あ！ユーノ君！ごめんアリサちゃん、すずかちゃん！ちょっとユ



「ノ君捕まえてくる！」

なのはがユーノを追い掛けに行った。

「なのは一人だと心配だから俺も行ってくる」

「うん。なのはちゃんのことお願いね」

「全くなのはは………普段運動オンチなのにあんなに走って……ちよつと翔！なのはが怪我しないようにしっかり付いて行きなさいよ！」

「応！任せろ！さすが、アリサ！」

そして俺もなのはとユーノを追うために走り出した。

「！この感じは！」

《お館殿よ！ジュエルシードだ！》

よし、これからジュエルシードを頂きに参りますか………

「行くぞ！ヘル！セット・アップ」

《セット・アップ、スタンバイ・レディ》

俺はセットアップをし、バリアジャケットを着込んだ。

「さあてヘルよ。新たにジュエルシードを頂きに行こうか！」

《解りもつした！お館殿！》

俺は空を飛び、ジュエルシードの反応のあった場所に向かって飛んでいった。

しばらく飛び、ジュエルシードの反応のあった所に着くと結界が張ってあった。

「おいヘル。結界を中和して中に入るぞ」

《解りもつした。……………よし、中和は成功したすぐに中に入れるぞ》

俺は体を結界に沈ませていき、中に入った。

するとそこには巨大な猫となのはと少年がいた。それに相對するように空中に金髪で髪型がツインテールの全身が黒いバリアジャケットを着込んだ少女とオレンジの長髪の髪に犬？の耳に尻尾を着けた女性がいた。

だが俺はそんな状態でも、ジュエルシードを奪うために猫に向かっ

て斬撃を飛ばした。

飛んでいった斬撃により、猫はよろめき、倒れた。

その瞬間、二組から視線が飛んできた。

少年となのはからは怒りの籠った殺気付きの視線が来て……金髪の少女とオレンジの長髪の犬耳犬尻尾の女性から驚きの視線と警戒を貫った。

「やあ、少年少女よ。そちらの少女と女性は始めましてだね。その猫が持っているジュエルシードを頂くためにこのネロ・カオスが参上した。そこをどいてくれたまえ」

「ネロ・カオス！貴様！何であの子猫に向かって非殺傷設定の攻撃じゃなく、殺傷設定の攻撃を出した！」

「酷いです！ネロさん！この子には何の罪も無いのに！」

「アンタ何者だい？フェイトの邪魔をしようってんならアタシが噛み殺すよ！」

「あなたは何者ですか？私はジュエルシードを集めないといけないの。邪魔をするなら！」

五月蠅いな……とりあえずは適当に答えてフェイトに発信器を着ければ良いか……

「皆が皆、感情的になってしまっているせいで何言っているかわからないね。ただ、俺の邪魔をしようと言うのなら全員一時、舞台から降りてもらわねばな。ゴースト・ゲンガー」

《ゴースト・ゲンガー》

俺が技名を言うとヘルからも技名が流れる。すると俺の体から四体の俺が現れた。

「何だあの技は?!」

「ユーノ君!あれ何?!」

「多分、フェイクシルエツトだと思う。大丈夫!ただの幻影だよ!」

俺は2体に指示を出し、少年となのはに襲わせた。

なのはは空中に一時逃げ、少年は自身のデバイスであろうパイルバンカーで斬り付けてくる。だが俺が生み出した分身は………その攻撃を防いだ。

「な?!」

少年が明らかに動揺した瞬間、俺の分身は受け止めていたパイルバンカーを弾いて少年に蹴りを入れて吹き飛ばした。

「ぐおつ?!?!」

少年はしっかりと受け身を取り、立ち上がった。

「おいユーノ!コイツ等実体が在るぞ!」

「そ…そんな…あんな魔法は聞いたことがない………」

当たり前だな。この技はもとヘルに登録されていた技だしな。あの神がどうゆう原理かは知らないが多人数を相手にするとき用に登録していてくれたもんだ。一応ヘルを完璧に使えるように知

識と身体はしつかりと貰っていたしな。

「残念だったな、少年よ。予測が外れたみたいだな。まあ俺には関係無いがな」

俺は他の2体にも指示を出し、フェイト・テストロッサとアルフに向かわせた。

四人が戦っている間に俺は魔法の呪文を唱える。

「暗き闇の深淵の彼方より来たりし闇の雷よ……全てに絶望と死を撒き散らせ」

「ああ！ダメえー！ー！ー！」

なのはが叫ぶがネロは聞いてないフリをする。そして魔法が放たれた。

「ダーク・デス・サダーク」

《ダーク・デス・サダーク》

俺の掌に付いている黒いビー玉みたいな所から黒い稲妻が放たれた。その稲妻は巨大な猫に一直線に向かって行った。

「ギニアアアアアアアアアアアアアアア？？！！！」

巨大な猫に直撃し、猫の身体からジュエルシードが出てきた。

「ジュエルシード、封印」

ジュエルシードは封印され、ヘルの中に入った。

「さて、俺の用事は済んだ。またジュエルシードのある所で会おう」  
俺はそう言っでゴースト・ゲンガーを消して結界を来たときと同じ様な方法で出ていった。

畜生畜生畜生畜生！あのネロ・カオスとか言う奴にジュエルシードを持っていかれた！

しかも触れられてはいなかったがなのはあの奴の技、ゴースト・ゲンガーとか言う技によって酷く痛め付けられていた。バリアジャケットはあっちこっちが切り刻まれ、顔にも奴によって頬を少し斬られ血を流していた。フェイトとアルフも同じ様に傷つけられた。

俺とユーノがなのはを介抱している間にフェイトとアルフは戦線離脱していた。

不意になのはが聞いてきた。

「ねえ、翔君……子猫は……どうなったの……」

それを聞いたユーノが倒れている子猫に駆け寄った。

「……………駄目だ。もう……………」

俺は腹の底から沸々と怒りが込み上げてきた。なのはは子猫の状態を聞いた瞬間泣き出してしまい、「私が……グスッ……早く……グスッ……あの子から……ジュエルシードを……グスッ……取り出していたら……うあああああああああ！」

俺はなのはが泣き止むまでなのはを胸の中で抱き寄せて待った。俺は奴を……あのネロ・カオスを絶対に許さない。アイツは罪の無い子猫を殺し、なのはに涙を流させた。絶対にアイツだけは何としても倒す！

暫くしてなのはが泣き止み、死んでしまった子猫を抱いてすすかとアリサの元へ向かった。

### 第3話 死を撒き散らす稲妻（後書き）

皆さまの感想が私の原動力です。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4488y/>

---

魔法少女リリカルなのは～悪を目指す者～

2011年11月20日14時00分発行